オスマン朝における「修史部局」の位置づけ
 ——「修史部局」分類に属する文書・台帳群の調査から——

On the “Secretariat of the Official Historian”
 in the Ottoman Empire:

An Investigation of the Documents and Registers Classified
 as Belonging to the Secretariat of the Official Historian

小笠原 弘 幸^{*}
 OGASAWARA Hiroyuki

ABSTRACT Ottoman official historians (*vekâyi'-nûvis, vak'a-nûvis*) wrote uninterrupted official Ottoman history from the beginning of the 18th century to the end of the Ottoman Empire. Continual historical writing of this kind must have required institutional support. Although former research on this subject has indicated that the various secretariats (*kalem*) gave information to the official historians, little is known about their concrete relationship.

Previous research indicated that there was a “Secretariat of the Official Historian” (*vekâyi'-nûvis kalemî*). It is said that this secretariat, whose chief was the official historian, was under the Imperial Cabinet (*divân-ı hümayân, “Supreme Courts”*) or the Office of the Grand Vizier Gate (*bâb-ı âsâfi, “Gate of Sublimity”*). But the study of the documents (*belgeler*) and registers (*defterleri*) classified as belonging to this secretariat, which are stored in the Ottoman Archives (*Başbakanlık Osmanlı Arşivi*), has been neglected, and there is little agreement as to their character. This paper investigates the relationship between the official documents and the official historians through an examination of those documents and registers.

There are 15 documents and 3 registers classified under the Secretariat of the Official Historian in the Ottoman Archives. I examined all of them and compared them with the chronicles of the official historians. I found that they were composed of various materials in no particular order. 11 documents and registers are not concerned with official history at all; the other 7 at least deal with the same theme as the official chronicles. However, none of these documents or registers bear directly on the chronicles.

It follows that the documents of the Secretariat of the Official Historian were

^{*} 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程

Ph. D. Student, Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo

probably not the ones given systematically to the official historians. This fact leads us to question even the existence of a “Secretariat of the Official Historian.”

I. はじめに

一国の公式の歴史を編修するという作業は、一個人では史資料収集の点で困難を伴う。まして数世紀に亘って編修し続けるには、史家（史官）に定期的に情報供給がなされるような制度的保障が不可欠である。例えば『史記』から『明史』まで24史併せて3,213巻、『新元史』を含めれば3,470巻もの正史が編修された中国では、歴代王朝において東観や著作局、史館、翰林院などが設けられ、王朝交代時に正史が執筆される為の基礎となる情報が収集・集積されていた。⁽¹⁾

イスラーム世界では、公的な歴史を継続して編纂するという歴史意識は、唯一オスマン朝において存在した。オスマン朝では、18世紀初頭から滅亡（1922年）まで修史官 vekâyi'-nûvis, vak'a-nûvis⁽²⁾ が原則としては途絶えること無く任命され、史書を編修し続けた。この修史官制度は、オスマン朝以外のイスラーム世界においては見られない、類例の無い存在としてイスラーム史学史上での重要性をもつ。その修史官による継続した史書編修が可能になったのは、オスマン朝において18世紀以降、官僚制度及び文書行政が発展し、書記の各部局 kalem から修史官に恒常的な情報提供が行われるようになった為であると言われている。これはイスマイル・ハック・ウズンチャルシュル、ベキル・キュテュクオールらの研究者によって主張され、現在ほぼ定説として受け入れられていると言って良い。⁽³⁾⁽⁴⁾

これを裏付ける典拠として研究者によって最も重要視される史料は、修史官ハリル・ヌーリー・ベイ・エフェンディ Halîl Nûrî Bey-Efendi（在任1794-1799）によってなされた上申と、それを受けて下された命令である。彼は、任官についての情報はタフヴィール tahvil 部局やルウース rûûs 部局によって、典礼 teşrifât に関する情報は典礼部局によって修史官に与えられることが「至高の国家の認められた慣例 rusûm」であるにもかかわらず現在省みられない状況になっていることを説き、いま再び書記の各部局から必要な情報が修史官に与えられるよう求めた。その結果、彼の意見に従って情報が与えられるよう勅令が發布されている。ここから、ヌーリーの時代には各部局から修史官へ情報が提供された——少なくとも、提供されるべく努力された——ことは確かであると言えよう。更にヌーリーの言からは、彼以前の時代には修史官への情報提供が滞り無く行われていたことが窺われる。しかし、ヌーリーの記述が含む内容以上の、部局から修史官への具体的な情報の流れについて扱った研究は、管見の限り存在しない。約200年に亘った修史官の編修活動を支えた情報供給の方法を検討することは、修史官制度のあり

方の一端を明らかにする為に重要である。

この問題を扱う際に検討せずに済むことができないのは、「修史部局 vekâyi'-nîvîs kalemi」の問題である。トルコ共和国の総理府古文書館には、御前会議 divân-ı hümâyûn 及び大宰相府 bâb-ı âsâfi に属するとされる「修史部局」に分類される文書・台帳群が所蔵されている。「修史部局」について、『総理府オスマン古文書便覧』（以下、『便覧』と略記）によれば「修史官とは出来事を書く者，“公式の歴史家”を意味する。オスマン朝において修史部局は、18世紀の初めに設立された⁽⁸⁾」としている。また、『便覧』旧版にはより詳しい記述があり、それによると「修史部局」とは「御前会議の組織において18世紀初頭に創られ、国家に与えられた史料を調査・記録して、日々の歴史の記録を職務とした部局」であり、「その部局長は修史官と呼ばれた⁽⁹⁾」という。この記述が事実ならば、「修史部局」分類の調査は、書記の各部局から修史官への情報の流れを研究する際に必須のものとなろう。

「修史部局」とそれに属する文書・台帳群に関する言及としては、上述の『便覧』の他、総理府古文書館の閲覧室で閲覧可能な『大宰相府部局目録』⁽¹⁰⁾（請求番号977番）に文書群について、同じく『大宰相府台帳目録 880-1252』⁽¹¹⁾（請求番号980番）に台帳群についての記述がある。前者はほぼ『便覧』旧版と同様の記述であるが、後者では台帳群を単に「修史官に属する台帳」と言及しており、「修史部局」については触れていない。この「修史部局」に属するとされる文書・台帳群に関する記述は以上のものに限られており、本格的な調査とその位置づけはいまだなされていないと言える。この研究の遅れは、「修史部局」分類の成立が比較的近年である（文書は1990年⁽¹²⁾、台帳は1989年に整理されて成立⁽¹³⁾）ことも理由の一つであろう。

以上の問題を受けた本稿の目的は以下の二つである。

(a) まず、「修史部局」分類の調査とその評価を行う。オスマン朝史研究の根幹史料である総理府オスマン古文書館に所蔵されている文書・台帳群は、いまだ完全な調査がなされているとは言えない。そのような状況において、所与の分類の徹底的な調査を行うことは、基礎研究として意味を持つであろう。

(b) 二つ目の目的は、調査の結果を通じて「修史部局」を位置づけ、修史官による史書編纂のあり方の一端を明らかにすることである。先行研究で言われるように、修史官は実際に「修史部局」によってサポートされていたのかどうか、「修史部局」の存在の有無も含めて検討したい。

II. 「修史部局」に分類される文書（15点）

「修史部局」に分類される文書群は、御前会議及び大宰相府に属するとされ、総理府古文書館においてコード A. VKN. (“A” は bâb-ı âsâfi, “VKN” は vak‘a-nüvislik を表す) に分類されるファイルに保存されている。全15点である。上述のようにこの分類の成立は1990年であり、比較的新しい分類であるといえる。

以下、見出しとしてまず登録番号、分類された際に文書作成日と目された日付、寸法（縦×横、単位はセンチメートル）、書体を記した。次に内容の要約を行い、当該文書の持つ性質や問題点に言及した後、文書の作成日に対応する修史官の史書との関係について比較検討を行った。

尚、手稿本の利用に関して本稿では可能な限り全ての異本を確認するよう努めたが、研究許可等の都合上、全てを参照することはできなかった。また頁数の表記は、紙幅の都合もあり特に重要な差異がない場合は一つの手稿本で代表させた。

①A. VKN., nr. 1 H. 1066年 20.3×14.5 ディーヴァーニー・クルマス体

「953年、ハイレッディン・パシャ Hayred-dîn Paşa が死去し、ベシクタシュ Beşiktaş ı に埋葬された」「ピヤレ・パシャ Piyâle Paşa がキオス Sakız 島を征服した日付、973年」など、海軍大提督 kapûdân-ı deryâ にまつわる10の短い話題とその年代が箇条書きにされている。

中央の折り目部分は破損しており修復が施されている。右上に953を解とする足し算の式が書かれている。この解はハイレッディン・パシャの死亡年と同じ数だが、これが何らかの意味を持つかどうかは不明である。年代表示銘 ta‘rîh の可能性もあり得るが、この数字に対応する語句は見受けられない。文書が制作された年代は明確ではなく、分類の際に H. 1066年のものとされたのは本文で言及されている最も新しい年代が H. 1066年である為と言う可能性が高い。

H. 1066年の条を記録した修史官は、一般に初代修史官とされるナイーマー・ムスタファ・エフエンディ Na‘îmâ Mustafa Efendi である（但し、彼の時代は制度としての修史官はまだ確立していなかった⁽¹⁴⁾）。『ナイーマー史 Ta‘rîh-i Na‘îmâ』の該当部分を検討した結果、本文書と類似した箇所は見受けられなかった。⁽¹⁵⁾

②A. VKN., nr. 2 H. 1080年 27.7×20.7 ディーヴァーニー体

バスラ Basra 総督（史料上の表記は hâkim-i Basra）の任命や、バスラへのクズルバシュ kızılbaş による攻撃など、バスラに関する7つの話題が箇条書きに記されている。H. 1080年の文書として整理されているが、H. 1081年にバスラ総督に任命されているフ

イラーリー・ムスタファ・パシャ Firârî Mustafa Paşa についての言及がある為、実際の文書作成日は H. 1081 年以降になろう。

念の為 H. 1080 年を扱う修史官の史書であるラーシト・メフメト・エフェンディ Raşid Mehmed Efendi の『ラーシト史 Ta'rih-i Raşid⁽¹⁶⁾』との対照を行った結果、本文書と関連性のある箇所は無かった。

③A. VKN., nr. 3 H. 1099 年 3 月 37.7×21.8 リカー体

イスタンブル近くのサカルヤ Sakarya 河、サバンジャ Sabanca 湖、そしてイズニクミト İznikmit の海とを繋ぐ運河建設の工事を、大宰相シナン・パシャ Sinân Paşa が請け負った事に関する記事。この件に関し多くの努力が払われたが、高官達がシナン・パシャが任に堪えないことをスルタンに進言した為、勅令が出されてこの任務が中止されたことを説明している。

本文書は、H. 1099 年の文書として分類されている。文書制作日を示す日付は文書中に存在しない。本文中に「bin doksan dokuz」と年数が記されているが、「bin」は後から行の上部に付け足されたものである（但し、見た限りでは同じ筆跡で書かれている）。また、右上に鉛筆で現代の数字で「999」と書かれている。本文中で言及されている「大宰相シナン・パシャ」とは、恐らく16世紀後半に大宰相を5回に亘って務めたコジャ・シナン・パシャ（在任 H. 988 年 7 月 14 日-990 年 11 月 10 日, H. 997 年 5 月 16 日-999 年 10 月 10 日, H. 1001 年 4 月 24 日-1003 年 6 月 6 日, H. 1003 年 10 月 29 日-1004 年 3 月 25 日, H. 1004 年 3 月 28 日-1004 年 8 月 4 日）を指すと思われる為、本文中の年代は H. 999 年が正しいと考えられる。実際、本文書で述べられているものと同じ事件が他の年代記でも比定し得る⁽¹⁷⁾し、H. 1099 年に大宰相を勤めたのは、キョプリュリュ・ダーマト・スィヤヴシュ・パシャ Köprülü Dâmâdî Siyavûş Paşa（在任 H. 1098 年 11 月 16 日-1099 年 4 月 27 日）、ニシャンジュ・イスマイル・パシャ Nişancı İsmâ'il Paşa（在任 H. 1099 年 4 月 28 日-H. 1099 年 7 月 1 日）、テキルダール・ベクリー・ムスタファ・パシャ Tekirdâğlı Bekrî Mustafa Paşa（在任 H. 1099 年 7 月 1 日-1101 年 1 月 11 日）の3名であり、「大宰相シナン・パシャ」に該当する人物は見いだせない。

このように文書の内容は H. 999 年の事件を扱っている。しかし実際の文書の制作年代は、書体としてリカー体が用いられていることから遥かに時代が下ると考えられる。オスマン朝におけるリカー体の使用は18世紀後半以降とされているから、少なくとも文書の制作年代はそれ以降になろう。⁽¹⁸⁾

尚、文書の上部に「ホジャ史からの引用 Hoca Ta'rihi'nden müdrec」と、朱文字で、異なる筆跡で書かれている。「ホジャ史」とはホジャ・サーデッディン Hoca Sa'ded-dîn の『諸年代記の王冠 Tacû't-tevârih⁽¹⁹⁾』を指すと思われるが、この史書はセリム I 世の死ま

でしか扱っておらず、H. 999年の事件がここから引用されることはあり得ない。

修史官の年代記との対比は H. 999年と H. 1099年の双方を対象とした。H. 999年を扱う修史官の史書は『ナイーマー史』である。通常『ナイーマー史』は H. 1000年から始まるとされているが、3点の手稿本は H. 986年から始まっている（但し H. 986年から999年までの部分は極めて要約された内容となっている）。当該手稿本の検討の結果、本文書と対応した箇所はなかった。H. 1099年を扱う修史官の史書は、『ラーシト史』であるが、こちらも本文書と関連性のある箇所は見いだせなかった。

④A. VKN., nr. 4 H. 1107年 17.2×10.2 ディーヴァーニー体

一方の面は、H. 1107年の年号と共に、諸任命や武器や大砲の準備などの12の短い話題が並べられている。文章が未完成なものも見られる。もう片面は、文字が薄れており判読が困難な部分もあるが、様々な宿营地 menzil とそこまでの所要時間が記載されている。両者がどのような意図のもとに作成されたかは不明である。

H. 1107年の記録は『ラーシト史』に記述されている。比較の結果、本文書と類似点のある記述はなかった。

⑤A. VKN., nr. 5 H. 1115年 3月3日 31.9×45.8 ディーヴァーニー体

H. 1115年に起こり、ムスタファ2世廃位の原因となった所謂「エディルネ Edirne 事件」について説明した文書。縦に4分割された紙に、表4頁、裏1頁に亘って細かい文字で記述されている。唐突に「15日日曜日…」という文章から始まり、何らかの文章の草稿が写しであると推察される。文書制作の日付は記されておらず、H. 1115年という分類は文書中で扱われている事件の日付から取られたものであろう。

H. 1115年を扱った修史官の年代記は『ラーシト史』である。『ラーシト史』には、エディルネ事件を扱った詳細な記述があるが、本文書と同一の記述はなかった。

⑥A. VKN., nr. 6 H. 1125年 36×16.1 ディーヴァーニー・クルマス体

ベンディル Bendir への食糧輸送を求めた文書。「我が幸運にして至福のスルタン Benim Devletlü Sa'adetlü Sultanım」という文句から始まる。日付や差出人などの記載はなく、また単語の綴りの間違いが多く見られることから、草稿であったと思われる。

H. 1125年の条が記録されている修史官の年代記は『ラーシト史』であるが、本文書に関連した記述は見られなかった。

⑦A. VKN., nr. 7 H. 1143年 9月16日 22×15.5 ディーヴァーニー体

H. 1143年 9月16日に起こった騒乱を説明した文書。群衆が集まったとき、イエニチェリ軍団長官 yeniçeri ağası と鎧師長 cebecibaşı などが相談し警備したが、8時に群衆は騒乱を起こした。騒乱は鎮圧されて叛徒達は逃げ、捕まった者は処刑されたことを説明している。また、イエニチェリ軍団長官、犬番長 sekbânbaşı、イエニチェリ軍団用人 kul

kethüdâsı の任命についても記述がある。

非常に崩れた字体で書かれ、文章の末尾は完結せずに途切れている。右方に2カ所メ
モのような書き込み（同じ事件を説明した記述の一部）があるが、これも完全な文章の
体をなしていない。

H. 1143年の条を執筆した修史官はサーミー・ムスタファ・エフェンディ Sâmî Mus-
tafa Efendi⁽²⁶⁾である。また、後に修史官スブヒー・メフメト・エフェンディ Subhî Mehmed
Efendi が、サーミーら前任者達の草稿を利用して書き直した『サーミー・シャーキル・
スブヒー史 *Ta'rih-i Sâmî ve Şâkir ve Subhî*』においてこの年の条を取り扱っている⁽²⁷⁾。両
者と本文書を比較すると、そのまま引き写した箇所はないが本文書と同じ事件を取り扱
った節が見られるという結果が得られた。⁽²⁸⁾

③A. VKN., nr. 8 H. 1145年3月3日 15.8×11 ディーヴァーニー体

右上に H. 1145年3月3日の日付が付されている。H. 1143年、大宰相ゲーマト・イブ
ラヒム・パシャ Dâmâd İbrâhîm Paşa とその用人 kethüdâ であるメフメト・パシャ
Mehmed Paşa、そしてゲーマト・カプダン・ムスタファ・パシャ Dâmâd Kapûdân
Mustafa Paşa が殺され、19日、スルタン位にマフムト Mahmûd 2世が即位、次席太刀
持ち silâhdâr-ı sâni のゲーマト・メフメト・パシャ Dâmâd Mehmed Paşa が大宰相と
なったことを説明した文書である。

H. 1143年に勃発し、大宰相の処刑とスルタンの廃位をもたらしたパトロナ・ハリル
Patrona Halîl の乱の経緯について記されている。文書右上に記された文書製作の日付
とは別に本文冒頭に事件が起こった時間が記されているのだが、奇妙なことに、H. 1143
年の「ラビー・アルアッワル月15日4時」と「ジュマーダー・アルアーヒラ月18日5時」
が続けて書かれている。実際には乱の勃発がラビー・アルアッワル月15日、ネヴシェヒ
ルリの処刑が同月17日、マフムトの即位が同月18/19日である。故に、文書冒頭に記され
た二つの日付のうち、正しいのは前者とすることになる。

H. 1145年の部分を執筆した修史官はシャーキルである。前述の手稿本との比較の結
果、本文書との間に関連性は見いだせなかった。但し、当然の事ながらイブラヒム・パ
シャらの処刑とマフムトの即位に関する記述はサーミーが記録したとされる H. 1143年
の条に存在し⁽³⁰⁾、間接的に参照された可能性はある。H. 1145年の条もスブヒーが後に書き
直しているが、同様に H. 1145年の条に関連した部分は見つけられず、H. 1143年の条に
同じ事件を扱った記述が見られた。⁽³¹⁾⁽³²⁾

④A. VKN., nr. 9 H. 1150年3月22日 31.5×22 ディーヴァーニー・クルマス体

文書の最初に「カーイメ kâime」と書かれている。本文は、オーストリア軍との戦い
について説明している。H. 1150年ラビー・アルアッワル月にオーストリア軍がボスニア

Bosna にあるバナルカ Banaluka の城塞を包囲し砦を築いた為、ボスニア総督ヘキム・ウル・アリ・パシャ Hekimoğlu ‘Alî Paşa の指揮のもと兵が急遽派遣されて、総動員令 neffr-i ‘âm が宣言され、戦いの末にバナルカは守られたことが説明されている。

カーイメとは、オスマン朝の文書行政においては3種類の文書を指し、請願書の代わりに使われるもの、テズキレ *tezkiye* の代わりに使われるもの、競売の際に使用されるものがある。本文書は正式な日付も署名も存在せず、内容もオーストリアとの戦争についてのものであり、通常カーイメで取り扱われるものとは異なる為正式な行政上の文書ではなかったと考えられる。

H. 1150年に修史官を勤めていたのはスプヒーであり、『シャーミー・シャーキル・スプヒー史』の H. 1150年の条は彼自身の手による。バナルカの戦いを扱った部分との比較の結果、本文書との間に明確な関連性は見いだせなかった。

⑩A. VKN., nr. 10 H. 1170年 25.2×19.8 ネスィフ体

文書上部に鉛筆で「写し *sûret*」と記されている。二つの段落に分けられ、スルタン・アフメト・モスク *Sultân Ahmed Câmi’i* に関する二つの記事が年代記から引用されている。

第1段落は、H. 1018年にモスク建立の基礎がおかれ、H. 1026年に金曜礼拝が行われたことを説明しており、『「アズィズ・エフェンディ史」より *min Ta’rîh-i ‘Azîz Efendi*』と記されている。第2段落は「新モスクでの宴 *Ziyâfet dar câmi’i-i cedit*」という見出しのもと、1026年にモスクのドームが完成し、高官やウラマーらが招かれて開かれた宴について説明している。末尾に『「ナイーマー史」より *min Ta’rîh-i Na’imâ*』と記されている。

第1段落の末尾に記される『アズィズ・エフェンディ史』とは、カラチェレビザーデ・アブドゥルアズィズ・エフェンディ *Karaçelebizâde ‘Abdül-‘azîz Efendi* の史書『篤信者の天国 *Ravzâtü’l-ibrâr*』⁽³⁵⁾を指すものと思われる。実際に、僅かな異同はあるものの519頁と532頁からの引用となっている。第2段落は同様に、『「ナイーマー史」第2巻150頁から151頁までの引用である。一部の違いを除いて、全く同様に書き写されている。文書では表題の「スルタン・アフメト・ハン」が抜けている。また、日付が『「ナイーマー史」では「前述の年」となっている。これは、文書に書き写した際日付が分からなくなるのを避けた為の措置であろう。

H. 1170年の文書とされているが、文書中にはこの年号は記されていない。H. 1170年の条を執筆した修史官はセイイド・ハーキム・メフメト・エフェンディ *Seyyid Hakim Mehmed Efendi* である。比較の結果、本文書を直接引き写した箇所はないが、スルタン・アフメト・モスクに関する記事が見出された。「平安にして至高の預言者の生誕祭に詩を誦誦する」⁽³⁷⁾という節で、スルタン・アフメト・モスクで預言者の生誕祭を祝う儀式が行

われたことが説明されている。本文書のモスク建立に関する年代記の引用文は、この儀式の為に調べられたか、或いはこの記事を執筆する為の史料となった可能性も考えられよう。なお、後に修史官アフメト・ヴァースフ・エフェンディ Ahmed Vâsîf Efendi が同じ年の部分を書き直しているが、⁽³⁸⁾ 関連記事は認められなかった。

①A. VKN., nr. 11 H. 1182年12月29日 25.8×19.8 ディーヴァーニー・クルマス体
当時ポーランドに傀儡政権を立てていたロシア、そしてホティン Hotin に近いポーランド国境の状況及びポーランドの亡命者ポトスキー Potski らの動きについて、そしてその後ホティンを巡ってロシアとの戦いに勝利したことについて説明している。文書の上下がそれぞれ数センチ破損しており、判読不可能となっている。H. 1182年12月29日の日付は文書中に存在せず、恐らくは文書を整理した者の手によって鉛筆書きで記されている。

H. 1182年のサファル月以降を記録した修史官は、ムーサーザーデ・メフメト・ウベイドウッラーフ・エフェンディ Mûsâzâde Mehmed Ubeydullâh Efendi である。同時に、遠征に従軍するための修史官としてエンヴェリー・サードウッラーフ・エフェンディ Enveri Sâdullâh Efendi が任命されており、同様に記録を残している。⁽³⁹⁾ ムーサーザーデによる史書は現存していないが、⁽⁴⁰⁾ 修史官ヴァースフ、そして修史官ではないが同時代の史家シェムダーニーザーデ・フンドウクルル・スレイマン・エフェンディ Şemdanîzâde Fındıklılı Süleymân Efendi が彼の草稿を利用したことが指摘されている。⁽⁴¹⁾⁽⁴²⁾ 比較の結果、本文書と具体的な関連がある箇所は見られなかった。

②A. VKN., nr. 12 H. 1189年 5月 68.5×26.4 ネスィフ体

紙片の片面は「オスマン王家の歴史 Tevârîh-i Âl-i ‘Osman」と銘打たれ、オスマン1世からスレイマン2世までのスルタン達の名前と119名の高官の名前が簡条書きに並べられている。もう一方の面は、「高貴なる宮廷の門衛長達の必要とされる配列表である Dergâh-ı mu‘allâ Kapıcıbaşlarının bir mucib-i tertîb defteridir」との表題のもと、80名の門衛長の名前が列記されており、H. 1189年5月の日付が記されている。具体的な用途は不明である。

H. 1189年の条は、エンヴェリーが2度目の修史官時代(H. 1190年シャッワール月からH. 1197年ズー・アルヒジャ月)に記録している。⁽⁴³⁾⁽⁴⁴⁾ エンヴェリーの史書との比較の結果、⁽⁴⁵⁾ 門衛長任官の記事は1カ所あるものの、それ以外に本文書と関連するような箇所は見られなかった。

③A. VKN., nr. 13 H. 1194年 76.2×49.9 ネスィフ体

「フランスとスペイン及びイギリスの間に起こった戦いが説明される Fransa ve İspanya ve İngiltere’nın mâbeyinde vâkı’ olan muhârebeleri beyân olunur」の見出

しから始まり、大版の紙に見開き 2 頁に亘って記述されている。H. 1194 年 2 月に行われたイギリスとスペインの海戦、及びイギリスとフランスの海戦を説明し、3 月にロシアがイギリス・スペイン・フランス以外の諸国と海上交通について会談した件について報告している。

所々で綴りの誤りや揺れが見られること、上述の表題の上（文書の最上部）に同じ書体による小さな文字で表題の一部が書きかけのように記されていること、文書制作の日付が記されていないことなどから、何らかの報告書の草稿である可能性が高い。

H. 1194 年の条を記録したエンヴェリー⁽⁴⁶⁾の史書との比較の結果、本文書と類似した箇所は見られなかった。

⑭A. VKN., nr. 14 H. 1197 年 36.7×16.4 ディーヴァーニー体

「諸事件の説明 der beyân-ı havâdisât」という表題のもと、数行ずつの 7 つの段落に分けられており、ハミディー・エフェンディ Hamidi Efendi が大宰相となったこと、エルハジ・ムスタファ・エフェンディ Elhacı Mustafa Efendi が大宰相の補佐官となり、故ハーフズ・エルハジ・ムスタファ・パシャ Hâfız Elhacı Mustafa Paşa の財庫長 hazinedâr であったエルハジ・エブーベキル・アー Elhacı Ebûbekir Ağa もまた大宰相の財庫長となったことなど、主に任官に関する話題が扱われている。最終段落だけは紙幅の都合であろうか、同一段落内で複数の話題が取り扱われている。一部滲んでおり文字が消えかけているが判読不可能というほどではない。

修史官の史書における H. 1197 年の条は、エンヴェリー⁽⁴⁷⁾と彼を襲ったヴァースフ⁽⁴⁸⁾が記録している。両者の史書との対照の結果、大宰相任命についての記事などは当然見受けられるものの、それ以上の明確な類似性は認められなかった。

⑮A. VKN., nr. 15 H. 1207 年 1 月 5 日 24.6×19.5 ディーヴァーニー体

数名の官吏が投獄されることについて（罪状は明記されていない）と、地方の軍団の秩序が保たれる為に布告された勅令について記されている。

H. 1207 年 1 月 5 日の文書とされているが、本文中に文書の制作年代に関する情報は無い。文章は未完で終わっており、また 8 カ所語句を訂正した部分が見られることから何らかの文書の草稿であると考えられる。

H. 1207 年の条を記録した修史官はメフメト・エミン・エディーブ・エフェンディ Mehmed Emin Edîb Efendi とされている。エディーブは H. 1207 年ムハッラム月 26 日までを記録している。本稿では、エディーブの史書を校訂したアリ・オスマン・チュナル⁽⁴⁹⁾による未刊行の博士論文を利用した。当時の修史官はエンヴェリーであったが（エンヴェリーは H. 1206 年までの事件を執筆しており、H. 1207 年は記録していない）、彼が遠征の内容を記録すべく従軍した為、イスタンブールの事件を記録する為の修史官にエディー

ブが任命された。⁽⁵⁰⁾ また、後にエディーブの記述を元にヴァースフが新たに書き直してい⁽⁵¹⁾
る。比較の結果、エディーブ及びヴァースフの史書に本文書と類似する内容は認められ
なかった。

III. 「修史部局」に分類される台帳（3点）

「修史部局」に分類される台帳は3点存在する。『便覧』によれば、文書と同じく御前
会議及び大宰相府に属するものとして分類されており、A. VKN. のコードが割り振られ
ている。⁽⁵²⁾ 文書より1年早い1989年に整理され、成立した分類である。

以下、上述の文書群の検討と同様に、台帳群の検討を行う。

①A. VKN., nr. 1699 H. 940年 44.5×16 ネスィフ体

全17頁からなる。『ベチェヴィー史 *Ta'rih-i Peçevi*』⁽⁵³⁾ 第1巻46頁から80頁までを写した
ものである。「物故したるパーディシャー [スレイマン1世] の聖なる御代に財務長官
defterdâr と国璽尚書 nişancı であった高名な者達について」の節の途中から始まり、ス
レイマン時代のウラマー達の列伝やスレイマンによる諸征服を縷々説明した節などを含
み、「ハーイン・アフメト・パシャ Hâin Ahmed Paşa をエジプト Mısır 州に御任命せら
れる」という節の途中で終わっている。始まりも終わりも途切れており、他の手稿本の
一部であった可能性が強い。綴りの間違い、行や単語をとばして書写した箇所が多々見
られる。

この台帳の日付が H. 940年とされているのは疑問である。『ベチェヴィー史』は17世紀
の作品であるから台帳が作成された年代では無く、内容も H. 930年までを扱った部分で
ある。少なくとも、『ベチェヴィー史』成立以降に本台帳の制作年代は降ることになるう。

最初の修史官の史書とされる『ナイーマー史』は前述のように H. 1000年、一部の手稿
本で H. 986年から始まるから本文書と対応する修史官の年代記は存在しない。

②A. VKN., nr. 1700 H. 1109年 25×17.5 ネスィフ体

「オスマン朝とオーストリアの戦争の際、1697 [H. 1109] 年のゼンタ Zenta の悲劇を
説明した修史官による覚え書きの一部」⁽⁵⁴⁾ であり、全8頁からなる。第2次ウィーン包圍
の失敗以降カルロヴィッツ条約まで、オスマン朝はヨーロッパ諸国との長い戦いを続けた。
その敗色を決定的にしたのがオーストリアに敗北した1697年のこの戦いであり、当時
の大宰相エルマス・パシャ Elmas Paşa が敗死している。1頁目は文章の途中から始ま
り、同様に最終頁も文章の途中で途切れている。

本台帳の3頁から4頁に、ゼンタの戦いの同時代人であったデフテルダル・サル・メ
フメト・パシャ Defterdâr Sarı Mehmed Paşa による「諸事件の精髓 *Zübde-i Vekâyiât*」

と、ほぼ同じ一節が見受けられることが検討の結果明らかとなった。⁽⁵⁵⁾故に、本台帳は『諸事件の精髓』を情報源として新たにゼンタの戦いを説明すべく書き下されたものか、逆に『諸事件の精髓』の情報源となった遠征の報告書の類の一部分である可能性がある。

H. 1109年の条を記録した修史官はラーシトである。『ラーシト史』のH. 1115年までの部分は『諸事件の精髓』を主要情報源としている。⁽⁵⁶⁾ゼンタの戦いに関しては逐語的な引用はなされておらず異なった文章となっているが、間接的な関連性は指摘できよう。

③A. VKN., nr. 1701 H. 1206年 2月 31.5×18 リカーベ

H. 1206年 2月の日付を持つ「修史官の覚え書きを含んだ台帳の一部分」⁽⁵⁷⁾であり、14頁から成る。台帳の上部と下部が破損しており、特に上部は破損が激しく判読が難しい部分がある。

1頁は、中途から文章が始まり、破損の為判然としないが、半ばから「勅令 hatt-i hümâyûn の写し」が記録されている。内容は、2頁以降と同じくロシアとの和平とその対応についてのものである。2頁以降は、冒頭にある「[H.] 1206年サファル月 9 日月曜日…開かれた最高会議 Meclis-i Şûrâ のマズバタ mazbata…」⁽⁵⁸⁾の表題の元、以下14頁まで、議事の内容及びそれに関連した勅令や報告 takrir の写し⁽⁵⁹⁾が控えられている。⁽⁶⁰⁾議題は、ロシアとの和平の成立が近いが、実際に成立するまで油断無く軍隊を整えることにに関してである。14頁で文章は途切れて終わっている。1頁目も中途から文章が始まっていることを勘案すると、何らかの台帳の欠落した一部分であると考えられる。

H. 1206年の歴史を修した修史官はエディーブであり、⁽⁶¹⁾上述したように後にヴァースフがそれを元⁽⁶²⁾に書き直している。照合の結果、エディーブ及びヴァースフの執筆した歴史と本台帳に類似した箇所は認められなかった。

IV. 位置づけ

以上で、「修史部局」に分類される文書15点、台帳3点の検討を終えた。この結果を基に、これらの文書・台帳群がいかなる性格を持つものであるかについての検討に入りたい。

本文書・台帳群に関してすぐ理解されるのは、点数が少なく、内容・形式・書体・時代について全く共通点の無い点である。特に時代に関して言えば、修史官制度の成立が18世紀初頭であるにも関わらず、それ以前に制作されたとされるものが5点（文書はA. VKN. 1, 2, 3, 4, 5。台帳は同じく1699, 1700。但し2と3の文書に関しては、既に述べたように時代が下る可能性がある）存在するのは奇妙である。そのうちA. VKN. 1699に関しては、修史官の史書の扱う範囲すら逸脱している。また、整理上の不手際も目立つ。文書の本文中に扱われている事件の日付と、文書作成の日付を混同していると推察

されるものも多い（特に文書の A. VKN. 2, 3, 台帳の1699）。修史官の年代記との関連については、計18点中11点が全く関連が無く、7点が少なくとも同じ話題を取り扱っていた。文書をそのまま引き写して利用したものは1点もなかった。以上の調査結果から、本文書・台帳群が、書記の各部局からシステムティックに「修史部局」に供給された文書・台帳によって構成されたものである可能性は低いと言える。

それどころか、分類の成立の新しさや統一性の無さを考慮すると、古文書館において文書・台帳が整理される過程で、修史官に少しでも関連性があると思われた史料が「修史部局」分類として事後的にまとめられた——つまり、実際には「修史部局」という部局は存在しなかった——可能性も考えられるのではないか。

修史官自身による「修史部局」への言及も、管見の限りでは確認されていない。修史官ヌーリーは、「はじめに」で前述したように書記の各部局から修史官に情報が与えられる件について述べているが、「修史部局」については言及していない。また、修史官レジャーイー・メフメト・エフェンディ Recâ'i Mehmed Efendi（在任1848-1853）が修史官制度改革の為に意見書 *lâiha* を提出している。そこで彼は、部下として秘書官 *münşî* や書写生 *mübeyyiz*, 外国語の翻訳者 *mütercim* などの任命、及び専用の部屋の割り当てを望んでいる。⁽⁶³⁾ この意見書は「修史部局」について触れておらず、修史官が基本的に個人で執筆に従事していたことを伺わせる。レジャーイーによる専任のスタッフと専用の部屋の要求は、修史官制度がより組織的に運営される契機が与えられ得た可能性を示唆しているが、彼の要求は結局却下され実現されることはなかった。これらの記述から鑑みると、修史官制度は少なくとも一個の独立した部局という形で運営されていなかった可能性が高いのではないだろうか。書記やウラマーとしての本務を務める傍ら修史官として史書を執筆すると言う修史官職のサブ・キャリア的性格もこれを裏付ける傍証となろう。⁽⁶⁴⁾

無論、非存在を証明することは困難であるから、「修史部局」が存在する可能性が無いとは言いきれない。しかし、たとえ「修史部局」が存在していたとしても、そこに集められたとされる情報（本稿で検討された文書・台帳群）は、実際の修史官の編修作業にどれほど寄与できたか疑わしいものであると言える。

以上の検討から、「はじめに」で挙げた二つの問題は、以下のように結論づけられる。

(a) 『便覧』及び『大宰相府部局目録』における「修史部局」に属するとされる文書・台帳群の解説は不適切であり、変更される必要がある。「修史部局」の存在を前提とするのではなく、単に「修史官の活動に関係する可能性のある文書・台帳群である」という表現が用いられることが望ましい。

(b) 修史官の編修活動は、「修史部局」という形ではサポートされてはいなかった可能性が高い。修史官への情報提供は、別の形で行われていたと推測される。

勿論、部局という形では運営されていなかったと考えられるとは言え、ヌーリーの記述に見られるように修史官に各部局からまとまった形で情報が与えられていたのは確実である。実際、修史官の史書に含まれる任官情報や儀式に関する記述は私撰の史書よりも遙かに詳細なものである。修史官による文書史料の利用の実態を完全に明らかにする為には、修史官の史書と、その史書で扱われる当該年代の文書・台帳を一つ一つ同定していく作業が必要とされよう。これに関しては今後の課題としたい。

注

- (1) 稲葉一郎『中国の歴史思想』創文社、1999、4-5；竹内康浩『「正史」はいかに書かれてきたか』大修館書店、2002、101-105。
- (2) 修史官制度の形成過程を扱った研究として、拙稿「オスマン朝修史官制度の形成」『史學雑誌』111/1(2002)、70-94。同じく形成期における修史官の言説を扱ったものに、拙稿「オスマン朝修史官の叙法」『日本中東学会年報』20/1(2004)(印刷中)。
- (3) 「修史官」を表すこの二つの語は、18世紀は前者、19世紀以降は後者が一般的に用いられ、意味上の違いは無いとされる。現代の研究においても両方の用例が見られ、両者を特に区別せずに使用するのが一般的である(拙稿「オスマン朝修史官制度の形成」71-72)。本稿でも特に注意を要する場合以外は双方の語に同じ「修史官」の訳語をあてるものとする。
- (4) İ. H. Uzunçarşılı, *Osmanlı Devletinin Merkez ve Bahriye Teşkilâtı*, Ankara, 1948, 64.
- (5) B. Küttükoğlu, *Vekayi'nüvis Makaleler*, İstanbul, 1994 (以下、VMと略記)、107-108.
- (6) タフヴィール部局は何らかの理由で空職となった官職への他の者の任命手続きを行い(M. Sertoğlu, *Resimli Osmanlı Tarihi Ansiklopedisi*, İstanbul, 1958, 307-308), ルウス部局は国庫やワクフからの給付手続きに関する書類を扱う(*ibid.*, 271)。
- (7) Başbakanlık Osmanlı Arşivi, Hatt-ı Hümayûn 48063.
- (8) Başbakanlık Osmanlı Arşivi Rehberi, İstanbul, 2000² (以下 BOAR2と略記)、290.
- (9) Başbakanlık Osmanlı Arşivi Rehberi, İstanbul, 1992, 7.
- (10) *Bâb-ı Âsâfî Kalemleri Kataloğu*, Vol. 2, İstanbul, 1990, ix.
- (11) *Bâb-ı Âsâfî Defter Kataloğu 880-1252*, İstanbul, 1989, 97.
- (12) *Bâb-ı Âsâfî Kalemleri Kataloğu*, i.
- (13) *Bâb-ı Âsâfî Defter Kataloğu 880-1252*, i-ii.
- (14) 拙稿, 前掲論文, 85.

- (15) Na'imâ Mustafa Efendi, *Ta'rih-i Na'imâ*, Vol. 6, İstanbul, 1283, 127-246.
- (16) Râşid Mehmed Efendi, *Ta'rih-i Râşid*, Vol. 1, İstanbul, 1281, 201-247.
- (17) Mustafa Selânîkî, *Ta'rih-i Selânîkî*, transliterated by M. İpşirli, Vol. 1, 1999², 232-233, 238.
- (18) M. Küttükoğlu, *Osmanlı Belgelerinin Dili (Diplomatik)*, İstanbul, 1994, 67.
- (19) Hoca Sa'ded-dîn, *Tacü't-tevârih*, 2 vols., 1280. オスマン朝の建国からセリム Selfm 1 世の死 (1520年) までを扱う。
- (20) M. M. Aktepe, "Naima Tarihi'nin yazma nüshaları hakkında," *Tarih Dergisi* 1 (1949), 37.
- (21) Na'imâ Mustafa Efendi, *Ta'rih-i Na'imâ*, Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi (以下, TSMK と略記), Hazine 1332, 30a-31a (他に以下の手稿本も参照した。TSMK, Revan 1169; Beyazıt Devlet Kütüphanesi (以下, BDK と略記), Beyazıt 4917).
- (22) Râşid, *op. cit.*, Vol. 2, 2-61.
- (23) *Ibid.*, 333-368.
- (24) Râşid, *op. cit.*, Vol. 3, 7-132.
- (25) *Ibid.*, Vol. 4, 2-13.
- (26) Sâmî Mustafa Efendi, *Kut'a min Ta'rih-i Sâmî*, TSMK, Revan Köşkü 1255, 1b-34b. 本手稿本を, カラタイはサーミーのみの草稿としているか* (F. E. Karatay, *Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi Türkçe Yazmalar Kataloğu*, Vol. 1, İstanbul, 1961, 291-292), 実際にはサーミーだけではなくサーミー及びその後任シャーキル・ヒュセイン・ベイエフエンディ Şâkir Hüseyin Bey-efendi, ラーミー Râmî, フズズ Hıfzı の記録した部分も含まれる (B. Küttükoğlu, "Subhî," *İslam Ansiklopedisi*, Vol. 10, 1980, 770)。また, İstanbul Üniversitesi Kütüphanesi (以下, İÜ と略記), T. 9768 及び BDK, Beyazıt 14038 の手稿本 (これら 2 点はサーミーによる歴史のみを含む) も参照した。
- (27) Subhî Mehmed Efendi, *Ta'rih-i Sâmî ve Şâkir ve Subhî*, İstanbul, 1198, 4a-24b.
- (28) Sâmî, *op. cit.*, 29a-32b; Subhî, *op. cit.*, 21a-23a.
- (29) Sâmî, *op. cit.*, 68a-84b.
- (30) *Ibid.*, 1b-10a.
- (31) Subhî, *op. cit.*, 44b-54b.
- (32) *Ibid.*, 7a-20a.
- (33) M. Küttükoğlu, *op. cit.*, 275-281.
- (34) Subhî, *op. cit.*, 96b-124a.
- (35) Karaçelebizâde 'Abdül-'azîz Efendi, *Ravzâtü'l-ibrâr*, İstanbul, 1832. 天地創造から 1646 年までを扱う。1657 年までの補遺も著された。
- (36) Seyyid Hâkim Mehmed Efendi, *Ta'rih-i Hâkim*, TSMK, Bağdad Köşkü 231, 212 b-234b.

- (37) *Ibid.*, 218a-218b.
- (38) Ahmed Vâsîf Efendi, *Mehâsinü'l-Âsâr ve Hakâikü'l-Ahbâr*, Vol. 1, İstanbul, 1219, 85-91.
- (39) Enverî Sâdullâh Efendi, *Ta'rih-i Enverî*, Vol. 1, Atıf Efendi Kütüphanesi (以下, AEK と略記), 1828, 3a-9b (同時に以下の手稿本も参照した。Süleymaniye Kütüphanesi (以下, SK と略記), Halet 590, Yahya 253; İÜ, T. 2351, T. 5994).
- (40) Vâsîf, *op. cit.*, 308-326.
- (41) Şem'dâni-zâde Fındıklılı Süleyman Efendi, *Mür'it-tevârîh*, transliterated by M. M. Aktepe, Vol. 2/A, İstanbul, 1976, 110-126. 1777年までを扱った年代記である。
- (42) *VM*, 116-117.
- (43) *VM*, 117-118.
- (44) Enverî, *Ta'rih-i Enverî*, Vol. 2, AEK, 1829, 41a-60b (同時に以下の手稿本も参照した。SK, Yahya 253; Millet Kütüphanesi (以下, MK と略記), Alî Emîrî Ta'rih 67; İÜ, T. 2347, T. 5995).
- (45) *Ibid.*, 54b.
- (46) *Ibid.*, 156b-176b.
- (47) *Ibid.*, 225b-254b.
- (48) Ahmed Vâsîf Efendi, *Mehâsinü'l-Âsâr ve Hakâikü'l-Ahbâr*, SK, Hüsrev 360, 5a-45a (同時に以下の手稿本も参照した。SK, Esad 2189; İÜ, T. 98).
- (49) Mehmed Emin Edîb, *Mehmed Emin Edîb Efendi'nin Hayatı ve Târîh'i*, transliterated by A. O. Çınar, Marmara Üniversitesi Sosyal Bilimler Enstitüsü Türkiyat Araştırmaları Enstitüsü Tarih Anabilim Dalı Yakınçağ Türk Tarihi Bilim Dalı (Doktora Tezi), İstanbul, 1999, 350-353. エディープによる H. 1207年の記録は一部の手稿本にのみ見られる。校訂者はこの部分をエディープの手によるものではないとし、比較の為に H. 1207年の部分も校訂したと述べている (*ibid.*, 350)。
- (50) Ahmed Cevdet Paşa, *Ta'rih-i Cevdet, tertîb-i cedîd*, Vol. 5, İstanbul, 1309, 115-116.
- (51) Vâsîf, *Mehâsinü'l-Âsâr ve Hakâikü'l-Ahbâr*, SK, Esad Efendi 3383, 40a-47a (同時に以下の手稿本も参照した。MK, Alî Emîrî Ta'rih 608; İÜ, T. 314, T. 1564, T. 2366, T. 2457, T. 4148, T. 4240, T. 5978, T. 5980, T. 9672).
- (52) *BOAR2*, 94.
- (53) İbrâhîm Peçevî Efendi, *Ta'rih-i Peçevî*, 2 vols., İstanbul, 1980.
- (54) *Bâb-ı Âsâfî Defter Kataloğu 880-1252*, 97.
- (55) Defterdar Sarı Mehmed Paşa, *Zübde-i Vekayiât Tahlil ve Metin (1066-1116/1656-1704)*, transliterated by A. Özcan, Ankara, 1995, 621-622.
- (56) *Ibid.*, llxii-lxxxiv.
- (57) *Bâb-ı Âsâfî Defter Kataloğu 880-1252*, 97.

- (58) マズバタとは、ある会議の結果を知らせる為に書かれた文書のことである (M. Kütükoğlu, *op. cit.*, 324)。
- (59) タクリールとは、ある事柄を関係者に知らせる為に書かれた文書のことである (*ibid.*, 214)。
- (60) 「前述の会議の出席者 (6-7頁)」「勅令の写し (7-9頁)」「犬番長の報告 (9-12頁)」「鎧師長の報告 (12頁)」「砲兵長 topcıbaşı の報告 (12-14頁)」「勅令の写し (14頁)」。
- (61) Edİb, *op. cit.*, 208-349.
- (62) Vâsıf, *op. cit.*, 20a-40a.
- (63) Karslızâde Cemâled-dîn Mehmed, *Ayine-i Zürefâ (Osmanlı Ta'rihi ve Müverrihleri)*, ed. by A. Cevdet, İstanbul, 1314, 109-111. レジャーイーの部分は校訂者による補遺である。
- (64) *Ibid.*, 93.
- (65) 拙稿, 前掲論文, 81-82。